

炭焼長者系説話の比較—比較研究はどこまで可能か

一九九三年六月六日、東京都立大学で行われた本学会大会シンポジウム「昔話伝説の比較研究はどこまで可能か——炭焼長者譚を例にして」のパネリストに新たに原稿を依頼したものです。

(編集委員会)

日本の「炭焼長者」に対応する中国の話について

馬 場 英 子

「炭焼長者」は『日本昔話大成』では、「運命と致富」の章に分類され、初婚型・再婚型のサブタイプに分けられている。「家を出た女が男と出会い、結婚して富を獲得する話」として、結婚相手を炭焼に限定しなければ、似た話は、中国、朝鮮をはじめ、ビルマ、タイ、インド、パキスタンなど東アジア地域にも広く分布している。しかし、これらの話は、日本で出版された崔仁鶴の『韓国昔話の研究』(一九七六)の分類を除いて、それぞれの国では「炭焼長者」に類するような名で呼ばれたり分類されてはいないようである。

「炭焼長者」が日本固有の独特的の話というだけではなく、東アジア各国の話ともつながりがあるとしたら、どのようなつながりが考えられるだろうか。それらの国ではどんなテーマの話として伝えられているのだろうか。アジア全域のこの話の広がりの中で日本の「炭焼長者」の位置が確認できたらと考えているが、本稿ではとりあえず中国の話についてながめてみた。

手順としては、まず、日本の「炭焼長者」初婚型・再婚型の分類に従い、それぞれに近い話を中国の話の中に求めた上で、次にそれ

らの話が中国の話の中で、どのような位置を占めているのか、どの

ような話を構成しているのかという点を中心と考えてみた。中国の「炭焼長者」型の話については、すでに伊藤清司氏に詳しい論稿があり、資料的にも、ほとんど追加するものはないのであるが、中国で「炭焼長者」とは呼ばれていない話をあえて「炭焼長者」という名前でくくつてしまわずに、中国の話の中で整理しなおしてみようというのが、本稿のささやかな試みである。

1 「炭焼長者・初婚型」に対応する話

「なぜか縁遠い金持の娘が、神のお告げで山の中の炭焼の押し掛け女房になり、炭焼かまどで金を発見して金持になる」というのが、日本の「炭焼長者・初婚型」である。中国では、鍾敬文の「中国民間故事型式」（一九三二）で「夫の福を受ける娘」、エバ・ハルトの「中国昔話の索引」（一九三七）では一九三「乞食と結婚した娘」、アルネ・トムソンのタイプ・インデックスに基づく丁乃通の「中國民間故事類型索引」（一九七八）では九二三B「自分の運命を生きる王女」にまとめられる話が、対応するようである。このタイプにまとめられる話は、家を出た娘が、貧しい男と結婚して富を得るという点で、日本の話と一致する。しかし中国の話は「父親の『だれのお蔭の幸せか』という問い合わせに、自分の福を主張して娘が家を出る」という父娘葛藤のモチーフから始まっているという点で、日本のは話とは違っている。また娘が結婚する相手は様々で、炭焼の例は

限られるというのも、日本の話とは異なる。

この話は、明代の『南詔野史』に輶角莊（雲南省大理地方）の地名由来譚として「王女が、父が結婚相手を選ばうとするのに反対して、牛が導いて行った所の人と結婚すると主張して、牛の背に逆向きに乗り、老婆と暮らす柴刈の嫁になる。夫は王女の装身具が何でできているのかと聞く。金だと答えると、柴を刈る場所にたくさんあると言つて、山から金をもつてくる。金橋銀路を作つて父王を迎える」というペー族の話が見えるのをはじめ、主に雲南、貴州、広西など、中国の西南部に住むペー、ミヤオ、チワン、ブイ、サニ、リー、ヤオなどの少数民族に広く伝えられている。特にペーやミヤオでは、いくつもの話が記録されている。

一方、漢族では、主に廣東、福建、台灣、浙江、江蘇省など揚子江以南の沿海部に伝えられ、ほかに湖北、湖南省、東北地方などにも見られるが、全国的には、あまり親しまれた話ではないようである。漢族の話は、簡単で短いものが多く、たいてい、この話の古い文献資料である仏典の話とほぼ同じ形で伝えられている。ここではまず仏典の『雜宝藏經』の話を紹介し、これに沿つて、漢族の話の特徴を見ながら、あわせて少数民族の話についても検討したい。

「……波斯匿王に一人の娘があつて善光といつた。聰明で美しく、父母にかわいがられ、宮殿中の者から慕われていた。父が娘に『おまえは私の力で宮殿中の者から慕われているのだ』と言うと、娘は『私には業の力があるので、父王によるのではありません』と答えた。王は聞くと、怒つて「今、おまえに、自分の業の力がある

かどうか試してみよう」と言い、左右の者を遣わしてもっとも貧しい乞食を捜して来させ、娘をめあわせた。王は娘に「おまえには自分の業があつて、私のお蔭を受けていないと言つたら、今、明らかにするがいい」と言つた。娘はそれでも「私には業の力があります」と言つて、貧乏な男と手を取りあって出て行つた。妻が夫に「ご両親はいらっしゃいますか」と尋ねると、夫は「わが両親は以前、舍衛城一の長者だつたが、両親はすでに亡く、家も滅び、頼るものもないで、わたしは乞食をしていいる」と答えた。妻が重ねて「あなたは旧居の場所が分かりますか」と尋ねると、夫は、「分かるが、屏も建物もすっかりこわれて空き地となつていて」と言つた。夫婦が一緒に旧居の跡を訪ね、周囲を調べて歩くと、その歩みにつれて地中に隠れていた宝がおのずから現れ出て來た。その珍宝で、人を雇つて家を建てた。一月もたたないうちに屋敷が完成し、使用人、妓女、下僕は数えきれないほどだつた。王はふと「娘の善光はどんな暮らしをしているものか」と思ひやると、ある人が「善光夫婦の富殿財宝は王さまにもひけを取りません」と答えた。王女はさつそく、夫に父を招待しに行つてもらつた。王が招待を受け行つてみると、いまだかつて見たこともないような立派な屋敷で感嘆した……

仏典の話であるから、娘が裕福に暮らす理由を「業」という言葉で表しているが、中国で普通に語られる話では、「福（福分）」「命（運勢）」などの言葉が使われている。金持の娘が家を出る理由は、仏典の話のように「自分の福を信じる」と言つて、父と対立

するものが多いため、漢族の話には、ほかに娘が婿選びの鞠やハンカチを乞食に投げる、貧乏人に嫁ぎたいと主張するなどして、父を怒らせ追い出されるものもある。たいていの話では、仏典の話のように、怒つた父親はもつとも貧しそうな男を娘の夫に選ぶ。町の近辺に暮らす、乞食、下男（飯炊き）、アヒル飼いとか、魚やカエル、タニシ採り（ハニ族の話）を生業とする者、薪拾いなどである。乞食でないまでも、元手無しの最下層の仕事をする男である。（漢族には、炭焼が登場する話はないようである。）さらに男が醜い、らしい病、禿げであるなど、福運からは最も遠い存在であることを強調する話が、漢族にも少数民族にもある。（不具の夫は財宝の発見と前後して、池に入つたり蛇を知らずに食べたりして、美しい若者に変身する。）

父親が婿を選ぶ漢族の話に対し、ペー、ミヤオ、ブイ、サニ、チワン、リリー、ヤオなどの話では、娘は、「牛や馬が止まつたところの嫁になれ」と父親に言われたり、あるいは自らそれを主張して、牛や馬に乗つて家を出て山に入つて行く。山で出会う夫は、柴刈が多いが、ミヤオ、リリー、ヤオ、ペー族の話では炭焼も登場する。男はたいてい母親と暮らしている。

富の発見についても、漢族の話では、船の下（川底）、床石、机の脚の押えの石などが金であることを、妻が見抜く。漢族にはまた、家を追い出された娘と夫が、泊まる所を捜していく、化け物が出るというので、誰も泊まる者のない空家に案内されると、化け物が現れて、「二人の到着を待つてずっと二人の宝を守ってきたから

受け取つてくれ」と言う、あるいは夫婦の息子のものと予定されていた宝を授けられる、という話も多い。仏典の話で、夫の実家の屋敷跡を訪ねると地中に埋もれていた宝が現れるというのは、善光王女がその宝を受け取るべき者だということを示しており、これも一種の予定された宝だろう。漢族にはほかに、宝の発見はなく、夫婦で勤勉に働いて財を築くというものもある。

一方、少数民族の話では、たいてい夫の仕事場で金銀宝石を発見する。柴刈などに行く山の中というのが多いが、ミヤオ、ヤオ族には、日本の話と同じく炭焼窯で金銀を発見するものもある。ハニ族の話では、タニシ採りの夫は川で真珠を拾つてくる。金があつた場所の石の板を運んでき、新しい家の扉とすると、それをを目指して山の中から金が飛んでくるというものもある。また、財宝に囲まれていながら、その価値を知らずに過ごしていた男に、財宝の価値を知らせるモチーフとして、妻が実家の母に餓別にもらつた金を渡して貰い物を頼むと、夫はそれを鳥や犬に投げてしまつてなくすという日本の話にもみえるモチーフが、財宝を発見する前に入る話もある。

父と対立して自分の福を求めて家を出た娘は、富を獲得することによって自分の福を証明する。娘の富の獲得で終わる話もあるが、その後に父との再会を述べる話も多く、この場合は、父に自分が獲得した富を見せて福を確認させる話と、父が没落することによつて娘の正しさを証明する話がある。仏典の善光王女の話で、父王が娘の屋敷を見に行つているように、娘が富を示す方法としては、立派

な屋敷を作るというのが多い。漢族の話には、富の獲得を隠して父の誕生日祝いにでかけ、貧乏と思ってばかりしている義兄たちから土地財産を安く手に入れるというものもある。娘が獲得した富を最も華やかに示しているのはペー一族の話で、父の屋敷まで「金橋銀路を作り、その上を歩いて来い」という父の命令を実行してしまう。(ペー一族の話の中には、仏典の善光王女の話で、王女が歩くと宝が現れ出たのと逆に、父と娘が競争して金橋銀路を作るが、父が敷きつめた金橋銀路は、娘夫婦が歩くと、ただの土くれに変わってしまうという話もある。) 父が没落する話では、乞食になるというのが多く、乞食になつて訪ねてきた父に、好物だった料理を出して和解するというが多い。ミヤオ族の話には、次章で述べる「再婚型」に対応する話同様、父親が恥じて自殺して竜神になるというものもある。宝の隠されていた場所を覆つていた岩を家の扉にすると、宝が飛んでくるが、訪ねてきた父はその宝に当たつて死んでしまうというのもある。

以上、仏典の善光王女の話に沿つて中国の漢族、少数民族の話を見て来た。この話は一言でまとめれば「福分を持つて生まれた女が自分の福分を証明してみせる話」であり、「家を出た女が男と出会い、結婚して富を獲得する」ことによつて、福分は証明されるのである。最初に紹介したように、この話を鍾敬文は「夫の福を受ける娘」、エバ・ハルトは「乞食と結婚した娘」と名づけているが、夫の福よりもむしろ娘自身の福の話であり、また夫を乞食と限定すると、人里離れた山の中に暮す男を夫に選ぶ少数民族の話は含まれなくな

る。王女という言葉を裕福に暮らす娘と広く解釈すればATの「自分の運命を生きる王女」というのが、一番適当かと思うが、本稿では、次章で扱う「炭焼長者・再婚型」との対比がしやすいように、娘が福を持っていることを強調して、かりに「福分のある娘」という名前で呼ぶことにする。箇条書にまとめるところになる。

1. 金持が娘（たち）にだれのお蔭の幸せかとたずねる。
2. （末）娘が自分自身の福分によるものと答える。
3. 父は怒って娘を（最も貧しい男とめあわせて）馬や牛に乗せて）追い出す。（牛や馬が足を止めた家の貧しい男と夫婦になる。）
4. 娘夫婦は財宝を見つけて、金持になる。
5. 父は娘が正しかったことを知る。

2 「炭焼長者・再婚型」に対応する話

日本の「炭焼長者」再婚型は、「夫に、家の切り盛りが気に入らないと、追い出された妻が炭焼と会って再婚し、金を発見して、裕福に暮らすが、夫は乞食になって元の妻を訪ねる」という話で、最初の結婚の理由として、「女には福分があり、男には福分がない」という産神の予言が加わるものもある。中国にも、「夫が、妻の側に落ち度がないのに一方的に妻を離縁する、夫はその後落ちぶれて乞食になり、元の妻と知らずに訪ねる」という話がある。漢族では、この話は竈神信仰と結びついて、かまどに飛

び込んで自殺して竈神になつた哀れな男の話として、広東から東北地方まで広く語り伝えられている。⁽³⁾ ただ、「福分のない男」を主人公として語られるので、ほとんどの場合、女の福分を象徴する金の発見のモチーフはない。また、初婚型で見た「福分のある娘」の漢族の話と同様、この話にも炭焼は登場しない。（日本の話でも「再婚型」には炭焼の要素の入らないものがある。）

一方、西南の少数民族では、この話は「福がないと予言された金持の息子が、福があるといわれる乞食娘と結婚するが、妻が貧しい出身であることを嫌って離縁してしまう」という「産神問答・男女の福分」に対応するモチーフが加わった形で語られる。少数民族の話は、例えればミヤオの話が「乞食娘の富貴の運」「貧女福命」などと題されているように初婚型に対応する「福分のある娘」同様、この話も福を持つた娘を主人公として語られており、貧しい出身の娘が最初の夫に追い出された後は、「福分のある娘」とほとんど同じ展開で、金の発見のモチーフもある。炭焼が登場する話もある。ミヤオやトン族など漢族の竈神信仰が入っているところには、更に竈神由来が最後につく話もある。

漢族の「竈神由来譚」とミヤオなど少数民族の「福分のある乞食女」に分けて、簡単にそれぞれの話の特徴を見ていただきたい。

第一は、日本の『神道集』の「釜神のこと」や蘆刈説話に近い話で、貧乏で暮していけなくなつた男が、妻と夫婦別れる、妻は金

持と再婚するが、夫のほうはますます落ちぶれて乞食になり、知らずに元の妻の家を訪ね、妻と知って恥じてかまどに飛び込んで死ぬという話である。⁽⁴⁾ 広東、台湾などの漢族に伝わる。

第二は、金持の夫婦が豆やくるみの実で福占いをしたところ、妻が勝つ。自分の方に福分があると思っていた夫は怒って妻を追い出す。妻はその後、裕福に暮すが、夫は落ちぶれて乞食になり妻の家を訪ねる。夫は妻が施しの食べ物の中に金を忍ばせてくれたのも気づかずには捨ててしまい、運のないことに絶望してかまどで自殺して竜神になるという話で、浙江、山東などの漢族に伝わる。

第三も、金持の夫が妻を追い出す話であるが、夫の愛人が離縁の原因になっている。この話は、山東、安徽、河南を中心にして江蘇から東北地方まで広く分布している。「張郎と郭丁香の話」⁽⁵⁾として語られているものが大半で、主人公の名前が一定しているのは、この話が芝居や語り物でひろまつたためと考えられる。女性を主な聞き手とする語り物の影響であろうが、第一、第二の話とは違つて、この話では、追い出される妻も郭丁香という名前を持ち、しかも竜神になる夫張郎よりも、むしろ妻の郭丁香を悲劇のヒロインとして話が展開している。

張郎と郭丁香の話を出し物にするものには、たとえば安徽・河南一帯の「竜書」（竜語り）と呼ばれる語り物がある。この「竜書」は『民間文学』と『曲芸芸術論叢』にそれぞれ別のテキストをもとにした紹介がある。安徽省には、また地方劇の廬劇にも「休丁香」「排張郎」（張郎を排す）などの演目が見える。（丁香を離縁する）がある。この三つはいずれも、張万（満）良が愛

人王妙（満）香のために妻の郭丁香を離縁するが、その愛人が原因で家が火事を出して張は乞食になるという話で、登場人物の名前も、郭丁香と夫、愛人のほか、郭丁香の再婚相手の範三（西）、士郎までほぼ一致する。（愛人の名前は、山東の話などではほとんど海棠になつていて、）しかしストーリーの細部では、かなり違いが見られ、同じ「竜書」でも、父親同士が雨宿りの縁で二人の結婚を決めるのと、郭丁香の親が仲人の口車に乗せられて貧乏で怠け者の張に娘を嫁がせるのとがあり、結婚後についても、夫の張は妻が嫁入りに着てきた家宝の服が光るのを見て、郭丁香を蛇の化身と思い込んで、すぐに塾に逃げ戻つてしまふというのと、郭丁香が勤勉に働いて張の家を裕福にするのとがある。（いずれも雑誌掲載の際に、整理の手が加わっているので、本来の語りをどの程度反映しているか疑問であるが、現在これ以上の資料は見られないでの、そのまま紹介する。）「竜書」を語るときには、張郎役は道士が神降ろしに使う鉄輪に羊皮を張り、柄の先に輪がついている神鼓といばらの枝を持ち、郭丁香役は扇とハンカチを持つ。以前は地主の家などで、娘が嫁入りする時には、大工を住込みで雇つて道具を作らせたが、その時に大工が歌つたという。

このほか、テキストを見ることはできなかつたが、山東の地方劇「兩夾弦」（四弦を伴奏にする語り物）⁽⁷⁾、また満族の「太平鼓」（竜書の神鼓と同様の太鼓を伴奏にする語り物）⁽⁸⁾などにも「休郭丁香」「排張郎」（張郎を排す）などの演目が見える。

この郭丁香の話には、第二のグループの話のように、張と丁香の

間の「福」占いのモチーフはないが、商売にでかけた張郎が占い師から「丁香の運勢はすばらしいが、張郎はすべて失う運」「丁香は三斗三升の真珠の運、張郎は三斗三升の糠の運」などと言われるのは、「産神問答」にも通じる福占いのモチーフのなごりと言えるのではないだろうか。「竈書」という名が示すように、張郎と丁香の話は竈神由来譚に違いないが、語りの中心は丁香の方にある。夫に追い出された郭丁香が牛に乗って出て行って、山の中で柴刈、野草とりなどをして暮す範三郎に出会うというのは、1で見た「福分のある娘」の少数民族型の話で、父と対立して家を出た娘が夫と出会う部分に対応する。「福分のある娘」ではこの後、金の発見へと続くが、郭丁香の話では財産の獲得ということは特に述べられないものが多い。「竈書」の一つに、郭丁香の涙で小屋にあった金が光つて、金を発見するというのであると、「俊娘と竈王」という河北省の話で、家を追い出され山の中で老夫婦に助けられた俊娘が、その家に乞食に来た老人から竈に金があることを教えられるのと、今回見た中では、金の発見のモチーフを持つ話は二例だけである。丁香を追い出した張郎は、新しい妻を迎えたとたんに火事を出し、財産も新しい妻も失い、失明して乞食となる。乞食となつた夫が元の妻の家の施しを受けるというのは、この「竈神由来譚」に共通しているが、郭丁香の話では、北方の食習慣を反映して、ほとんどの話で、うどんを与えている。⁽⁹⁾（南方の話では、米粉で作った団子のようないものの中に金を包み込むというが多い。）施されたうどんを食べて、昔、妻が作つたうどんと同じだと気づくものもある。うどん

の中に入れるのも、金や銀ではなくて、鉄、指輪などである。これは前夫を援助する金目のものであると同時に、夫婦の思い出の品でもあり、富を自分のものとできない運のない男を象徴するモチーフに、語り物らしい脚色が加えられている。妻は人一倍長い髪をしており、その髪を入れるというのもある。なお張郎は死後竈神になるほかに、さらに足が火かき棒、服が台拭きになつたなどと語るものもある。

次にミヤオなどの「福分のある乞食女」について見ていただきたい。これは、福分の有無を金持の息子の零落と乞食娘の富の獲得といふ、男女の貧富の逆転を表した話である。四川省のミヤオの「乞食女」という話は、次のようである。⁽¹⁰⁾

地主が息子の運勢を占つてもらうと、同年同月同日同時に生れた娘と結婚しないと幸せに暮せないといわれる。岩穴に住む乞食の娘を見つけて夫婦にするが、息子は、塾で、嫁は乞食とばかにされので、妻を追い出そうとする。妻はくるみの中身の大きさで二人の運勢を占おうという。夫のくるみは皆、空っぽで、妻のくるみは身が入っている。それでも夫は、妻が自分の名声に傷をつけたと、ラバを一頭と銀を少しもたせて追い出す。妻がラバに任せて行くと、ラバは森の奥の柴刈と老母が住むかやぶき小屋に連れて行くので、柴刈と夫婦になる。新しい夫に銀を渡して米と肉などを買つてくるようになると、柴を刈る所の洞穴にいくらでもあるという。翌日、夫婦で行って見ると、銀の山なので、立派な屋敷を作る。姑の誕生祝に施しをすると、乞食になつた前夫が現れる。銀を団子に包み込んで、昔、妻が作つたうどんと同じだと気づくものもある。うどん

で持たせるが、前夫は途中で落としてしまい、その団子は女のものと届けられる。妻を再訪してこのことを聞いた前夫は、絶望してかまどで自殺する。

この話で、最初に「占い師」が地主の息子には福がないことを述べて、息子の運勢を補う福分のある娘を探しだしているのは、日本の「産神問答・男女の福分」の産神の予言に対応する。このような話は、中国の西南に住むミヤオ、トン、ヤオ族などに見えるが、漢族の話は今回見た資料では、台湾の一例だけである。トンの話では、占い師が福分のある娘を見つけだすではなく、息子に福がないといわれた金持が、門口に生銀をぶら下げてそれを銀と見抜いた女を嫁にしている。(舅が福のない息子に福のある嫁を探す話は朝鮮にもあるが、中国では、今回見た資料ではこの話だけである。)

しかし占い師の予言によって福のない男の妻となった乞食娘は、結局、乞食の出身を厭われて追い出される。女は馬に乗って出て行って、新しい夫に会った後、金銀を発見する。この部分は、1の「福分のある娘」の少数民族型の財宝発見の部分と同じである。「福分のある娘」と違うのは、この話では最後に福がない最初の夫が没落して乞食になったことを語るところぐらいである。漢族の話と同様、最後に竈神由来がある話もある。この乞食娘の話は、結局、前半と最後が違っているだけで、まん中の部分では、初婚型に対応する「福分のある娘」の少数民族型の話と変わらない。

以上、「炭焼長者・再婚型」に対応すると思われる漢族の「竈神由来譚」とミヤオなどの「福分のある乞食女」を見てみた。このう

ち、漢族の「竈神由来譚」は、エバハルトでは一七七「銀の移動」のサブタイプとして、また丁乃通の索引では、八四一A「金貨を見分けられない乞食」として、集められている。どちらも福分のない男を主人公として、財宝は持つべき人の元におのずからついて行く、富を得る運を持ち合わせていない者には人がいくら富を与えるとしてもだめだ、という福分のなさに注目して分類している。この「竈神由来譚」と「福分のある娘」との間には、日本の「炭焼長者」初婚型と再婚型をつなぐ炭焼のような共通項もなく、それぞれ福がある者とない者、男と女、という主人公を異にする別の話として分類されている。しかし、この二つの話はいずれも福をテーマとしており、しかも福があるのは女で福がないのは男という点でも一致している。福の有無をちょうど逆の立場から述べた話ともいえ、視点を回転させれば、ほとんど重なり合う話でもある。たとえば「竈神由来譚」の中で、最も広く親しまれている郭丁香型の話は、先に見たように、福分のない夫より、むしろこの夫に追い出される妻を中心と語られていて、実際は女を主人公とする話になってしまる。女主人公に注目すれば、これは福分をもった女の話であり、当然「福分のある娘」ともつながってくる。(財宝の発見がないことを除いて少数民族型の「福分のある娘」とそつくりの展開をする。)少数民族の話が、再婚型に対応する話も女を主人公としていることはすでに述べたとおりであるが、「福分のある娘」の主人公が金持はすでに述べたとおりであるが、「福分のある娘」の主人公が金持の娘であったのに對し、こちらは貧しい出身の女で、いったんは結婚して一緒に暮した貧しい女と金持の男の離別後の貧富の逆転に

よつて、女の福分を強調している。初婚型を「福分のある娘」としたのに対照させて、再婚型に対応する漢族と少数民族の話は、「夫婦の福分（竈神由来）」として、次のようにまとめてみた。

1. （占いの結果、夫は福分がなく、妻は福分がある。）
2. 夫が自分の都合で、妻を離縁する。
3. 妻は別の男と再婚して（財宝を発見し）裕福に暮す。
4. 夫は乞食になり、知らずに妻を訪ねる。
5. 妻は金を食べ物の中に隠して夫に与えるが、夫は気づかずには捨ててしまう。
6. 自分に運のないことを知つて夫は自殺する／竈神になる。

3 まとめ

以上、日本では、炭焼かまどで金を発見する不思議を共通項として、同一話型のサブタイプとされる「炭焼長者」初婚型、再婚型に対応する話を中国の話を搜してみた。

漢族と少数民族の話を総合すると、初婚型は「福分のある娘」、再婚型は「夫婦の福分（竈神由来）」とまとめられ、中国では、この話は運命譚として語られていることがわかる。しかし漢族と少数民族では語られ方にかなり違いがあることも、すでに見て来たところである。漢族の話では、富は山の中など特定の場所にあるものではなく、隠されていた宝が、男と結婚することによって、現れたり、化け物屋敷といわれた場所で与えられたりする。夫婦勤勉に働くこ

とによつて幸せになるというのもある。富は福分のある者にはおのずからついてくるし、福分がなければ身につかないという象徴的なものとしてとらえられている。これに対して、少数民族の話では、富は金や銀など財宝そのものであり、山の中での財宝発見に、女の福分が表される。初婚型を「福分のある娘」、再婚型を「夫婦の福分（竈神由来）」に対応させたのは、漢族の話を基本にした分類で、少数民族では、話の冒頭こそ父親の葛藤と夫婦の葛藤で違つていても、中心は女主人公の金発見にあり、はつきりしたモチーフの差異は出てこなかつた。今回は、日本の話との比較を考えて、少数民族の話と漢族の話を一緒にまとめましたが、この点については機会を改めて考え直したい。

最後に、日本の話を、中国の「福分のある娘」と「夫婦の福分」から見直すと、「炭焼長者・初婚型」は、「福分のある娘」から、父と娘の葛藤という大枠を外した話になつてゐる。この枠は、中国の話では、少数民族と漢族と共に通する基本の部分である。この枠を外してしまうと、家を出た女の男との出会いと富の獲得になるが、この部分では少数民族と漢族の話が異なつてゐることは先に見たところである。日本の「炭焼長者・初婚型」の娘が山奥に入つて行って、夫となる男と出会い、金を発見するという展開は、漢族ではなく、ペー・ヤミヤオなど少数民族の話に近い。日本の話で話題名になつてゐる「炭焼」も、少数民族の話なら登場するものもある。ただ、ペー・ヤミヤオなど炭焼が登場する話をもつ民族には、炭焼のかわりに柴刈が出てくる話もあり、日本の話について言われるような、

この話と炭焼や金属精練との特別な関係は見られないようである。

日本の「炭焼長者・初婚型」が、対応する中国の話の一一番基本になる枠を欠いていて、一方で、女が出会う男がほとんど炭焼に限定されていることは、日本で広く伝えられる話が、この話の一般的な姿ではなく、特殊な形であることを示しており、そのような話がひろまっていることから、この話の日本伝播の独特さが窺える。

これに対して「炭焼長者・再婚型」と「夫婦の福分」の構造は基本的に一致する。「初婚型」に較べて、日本の話数は少ないが、蘆刈説話や沖縄の「男女の福分」の産神問答など様々なバリエーションも含めて、漢族と少数民族の話にそれぞれ対応する話を見出せる。

日本で研究されているある話について、同列に比較検討するには、中国は広大すぎ、見られる材料はあまりにも乏しい。非常な限界を感じるが、いちおう現在までの段階で、日本でも見られる中国の文献資料を整理しておいた。今後の研究に多少とも参考になれば、幸いである。

〔註〕

- (1) 伊藤清司『昔話 伝説の系譜』(一九九一・第一書房)など。
- (2) この『雜宝藏經』の話自体は「波斯匿王娘善光女語」として、『今昔物語集』巻2にも見え、日本でも知られていた。しかし、父娘の対立がなく、また娘が出会う男が炭焼と決まっていいる(芋掘り長者、無焼長者などもあるが、全国的に分布し

ているのは、炭焼長者だけである)日本の「炭焼長者・初婚型」とこの話とは、日本では直接結びつかないようである。

(3) 竜神の由来は、中国各地で様々に語られており、このことについては飯倉照平「中国のかまと神をめぐる物語」(『昔話伝説研究』一六号、一九九一)に詳しい。

(4) 中国の竜神由来と日本の蘆刈説話との関係については小林弘子「蘆刈説話—その源流と伝承について—」(『国語と国文学』五四卷一二号、一九七七)に詳しい。

(5) 竜神の姓を張することは、早く唐代の『酉陽雜俎』にも見える。

(6) 「民間趣事新集」の「椀底の金の釵」という張郎と郭丁香の話の解説にも「この話は小戯、鼓詞(太鼓の伴奏で語る語り物)、唱本(語りもののテキスト)に編まれている」とある。

(7) 山曼ほか『山東民俗』一九八八。

(8) 倪鍾之『中國曲芸史』一九九一、四〇九頁。

(9) 竜神とうどんについては村松一弥「唐土の釜神のこと」(『人文学報』七八号、一九七〇)に詳しい。

(10) 『中國民間文学集成四川宣賓地区卷(1)』(一九八九) (劉守華『中國民間故事精選』一九九三所収)。

※馬場英子・千野明日香両氏作製の類話比較の表は、三五~三八頁に掲載しました。

(編集委員会)